

歴史の教訓(序)

杉山 和男 *kazuo Sugiyama*

(財)国際貿易投資研究所 理事長

冷戦の終結以来、米国の存在の強化、EU 統合の進展、発展途上国の変容、中東地域の動乱など世界の政治、経済が大きく変動する中において、わが日本がどのような戦略的目標をもち、次々に発生する諸問題にどのように対処すべきかが、日本の盛衰を決める課題である。その実践は政府と民間企業のビヘイビアにより現実化されるのだが、複雑化する国際情勢に関し、少しでも有効な信頼性のある情報をとりまとめ分析し、読者に提供することが本誌の目的であると思う。

その目的は承知しつつも、これとダイレクトには関係ないことも含めて、今後何度か巻頭に駄文を連ねることをお許しいただきたい。

さて最近法事などへの出席が多く、特に中学(都立一中)、ネイビー(海軍経理学校)、旧制一高などの学友達の葬儀などが増え、同世代の友人達の人生を、そして自分自身の人生を回顧する機会が多い。太平洋戦争(日本から見れば大東亜戦争)の終結がもうほんの少し遅ければほとんど確実にハイティーンで人生を終えたに違いない私共の年代の者にとり、その後の半世紀以上の平和な時代を過ごせたことは誠に幸運としか思えないが、その幸運に値する意義ある人生を過ごすことができたかどうかという思いにつながる。

最近の私の楽しみの一つは、日本の古典を読むことにあるが、中でも最も平易で感動の多いのが「平家物語」であり、特に平知盛が勇戦敢闘の後、「今は見るべきほどのことは見つ」と鎧2領を着て入水する場面は感慨深い。平家一門の急激な栄達と衰亡に、人の

世の定めをすべて見たという思いを一言で表している。私もこのような諦観と満足感をもてるよう日々を過ごしたいと思っている。ともあれ平家一門の悲劇は、その潔さを含め、日本人に愛好された物語だが、近代日本の最後の内戦「西南戦争」も江藤淳が度々書いている「全的滅亡」の物語であり、貧困だった日本が造った空前絶後の大戦艦大和と武蔵を擁する帝国海軍も全滅の戦を行った。江藤の「全的滅亡」という言葉に、私は西郷軍と平家と海軍を連想する。その中で勇敢に、悲愴に闘った男達の話は枚挙にいとまない一方、特に太平洋での帝国海軍の戦略的にも戦術的にもあまりにも不甲斐ない負け戦には驚きを禁じ得ない。終戦時「海軍生徒」としてその一員だった私にとっても敗因の解明は、勇士達の鎮魂のためにも長年の課題であるが、かつての日本海での完勝や緒戦の戦果での驕りに加え、相手についての情報の決定的な不足が挙げられる。このことはひとり海軍のみならず、幸運にもやっと統一国家をつくり上げたものの、思わざる日露戦争の勝利で英米と並ぶ世界三大国になったと錯覚し、国際情勢の圧力はあったとはいえ対中戦争という泥沼に入り込み、さらには対米戦争という無謀な挑戦を行うに至った近代日本の行動全体についてもいえることと思う。

第二次大戦での完敗に至った要因は、国際的情報の決定的欠落と、国のリーダー達の愚劣な判断と、例外（たとえば大正期を中心とする普通選挙実現運動）はあるにせよ、ほとんどの場合に誤って形成されたいわゆる世論の圧力の三つを挙げたいと考える。

我々の子孫の時代においてわが日本が「全的滅亡」やそれより恰好の悪い落魄した国家に陥ることを防止するためには、上述の三つの点につき深刻な反省を行い、歴史上の教訓を探ることが必要だと思う。（次号以降、本件についてとりあげていく予定である。）